

幼児における歯列および口呼吸調査 第2報

○下平尾 知波, 笹岡志帆, 小石剛
(医療法人優心会こいし歯科)

【目的】

近年, 幼児来院者において歯列不正を主訴とする者が多い. また幼児における口呼吸の者も多いと感じ, 幼児における歯列および口呼吸の状況を調べている. 平成26年も引き続き調査を行ったので報告する.

【方法】

兵庫県宝塚市の某幼稚園児名678名(3歳から6歳)を対象とし, 平成24年から26年の1年ごとに, 歯科検診時に歯列の状態および口呼吸の有無について調べた. 歯列の状態は, ①異常なし, ②スペースなし, ③過蓋咬合, ④交差咬合, ⑤開口, ⑥反対咬合に分類した. 霊長空隙および成長空隙が認められない者を②スペース無しとし, 上顎前歯が下顎前歯を3分の2以上被蓋するものを③過蓋咬合とし, その他の異常が見られない者を①異常なしとした. 口呼吸は, 安静時に口唇が開いている, 口唇の乾燥を認める, 前歯部のみに色素の沈着を認める, のうちいずれかを認める者を口呼吸とした. 口呼吸と学年の相関の統計解析には, ピアソンの相関係数を使用した.

【結果】

歯列の状態は, ①異常なし25%, ②スペースなし35%, ③過蓋咬合29%, ④交差咬合4%, ⑤開口4%, ⑥反対咬合3%であった. 学年別では, 3歳児ではそれぞれ①37%, ②28%, ③25%, ④4%, ⑤3%, ⑥3%, 4歳児では①17%, ②41%, ③32%, ④4%, ⑤3%, ⑥3%, 5歳児では①23%, ②35%, ③28%, ④5%, ⑤5%, ⑥4%であった. また, 平成24年度の3歳児ではそれぞれ①15%, ②12%, ③17%, ④5%, ⑤1%, ⑥2%, 4歳児は①16%, ②30%, ③25%, ④1%, ⑤2%, ⑥1%, 5歳児は①35%, ②30%, ③24%, ④1%, ⑤0%, ⑥8%であった, 平成25年度ではそれぞれ3歳児が①58%, ②13%, ③22%, ④2%, ⑤2%, ⑥1%, 4歳児では①25%, ②28%, ③29%, ④8%, ⑤4%, ⑥4%, 5歳児では①40%, ②21%, ③31%, ④1%, ⑤2%, ⑥2%であった, 平成26年度では順に3歳児が①14%, ②46%, ③28%, ④0%, ⑤6%, ⑥6%, 4歳児では①12%, ②30%, ③49%, ④4%, ⑤2%, ⑥3%, 5歳児では①3%, ②31%, ③43%, ④2%, ⑤16%, ⑥5%であった.

口呼吸を認めた者は全体で45%であった. そのうち3歳児が33%, 4歳児が44%, 5歳児が57%であった($P < 0.05$).

【考察】

年齢別でみるとスペースなし・過蓋咬合・交叉咬合では3歳児から4歳児にかけて割合が増加しており, 4歳児から5歳児にかけて減少している. このことは4歳から5歳にかけての脳頭蓋および上顎の成長による改善と考えられる. 開口および反対咬合は3歳よりも5歳での割合が大きい. これは, 開口および反対咬合が舌癖による影響であるならば, その影響が継時的に表れた結果と考えられる.

平成26年度の不正咬合の割合が増えたことは, 単に不正咬合者が増えただけとも考えられるが, 調査基準があいまいであった可能性も否定できない. そのため, 今後は基準の改正や明確化を行い, 調査を続けていきたい.